

第14組西寶寺住職 野田 惠光

多くの感動を残して北京のオリンピックが終わりました。厳しい勝負の明暗の中で、選手から最初に出た言葉は、周囲への感謝の言葉でした。まったく誤魔化しのきかない状態で、自分自身に向き合い、命がけの努力をしてきたアスリートだからこそ気付いた、「一人では成り立たない」自分の存在を自覚した言葉なのでしょう。

先日、私の地域にあるお寺の前坊守さんが亡くなりました。夫である前住職は3年前に他界されているのですが、私が尊敬し、何かと頼りにしていた存在でした。前坊守さんと親しくお話する機会を持ったことはありませんでしたが、一度だけ声を掛けていただきました。仏事のことを聞くために前住職をお訪ねした時に、たまたま同席された前坊守さんが、「体裁ばかり気にして、お勤めや作法がおろそかになってはいけませんよ」と微笑みながら言われました。25年前のこと、前住職を通してたった一回のご縁でありましたが、私の金言となっています。

私たちの生活は、人間や社会、自然などとの様々な交わりの中で営まれています。ところが、往々にしてその事実を置き去りにして、自分中心の考えで事を進めようとします。当然、思い通りにならないことが多く、責任転嫁して不満や腹を立てることになります。社会で生活するということは、数え切れないほどの縁に支えられて私が存在するということです。因縁和合して存在する私の命の事実を、繰り返し繰り返し認識していくことが、今を喜べる自分につながることはないでしょうか。